

【ポスター発表】

当事者の視点から見た貧困

—意味・エイジェンシー・制約—

○ 尚綱大学短期大学部 氏名 陳 勝 (009460)

キーワード：貧困当事者、参加型貧困調査、貧困理解

1. 研究目的

本研究の目的は、貧困当事者を包摂する参加型貧困調査を通じて、貧困当事者の主体側から貧困を理解することである。

2. 研究の視点および方法

貧困研究の蓄積がより多くあるイギリスでは、1990年代以後従来の貧困研究に対して次のような批判がなされている。これまでの貧困研究は貧困の構造的側面に焦点化し、貧困は構造のせいであると指摘するが、実在の人間への配慮が少なく、貧困当事者がそこでの議論や調査から排除され他者化にされている。結果的に、貧困当事者が貧困をどのように理解しているかが明らかにされていないままに「貧困」が構築されている。これに対して、一部の研究者はこれからの貧困研究を行う際により包摂的な方法で、貧困経験者の視点を取り入れること、そしてそれを参加型の手法を通じて行うことを提起し実践してきた。こうした参加型貧困調査は、貧困当事者の調査への「参加」を保障することによって、貧困当事者の視点から貧困を理解するのに有効だと評価されている。

上記に対して、日本では近年来貧困者自身の生活意識や貧困経験を理解しようとする研究はいくつかあるが、貧困者が調査の主体となり、自分たちの関心を調査アジェンダに組み込んで自らの貧困分析を行っていくという点では十分とは言えない。こうした貧困当事者の「参加」を意識して行われた調査研究は日本ではいまだ少ない状況に対して本研究は上述の海外で行われた参加型貧困調査を検討し、そこから得られた示唆をもとに日本でもこうした調査を実施し、貧困当事者自身が貧困について語ることを促進し、彼らの貧困に対する見解や分析を実証的に捉えた。本調査は2021年1月から同年10月までに実施したものである。参加者は、北海道を中心に貧困経験がある若者(18歳から30代以下)である。具体的な構成は男性/女性、学生/社会人、日本人/外国人、全て50%対50%であり、計32人である。参加型アプローチを用いて、参加者の属性が同一の4人で1つのグループにし、8グループとした。各グループは毎回1~3週間の間隔をあけて3回集まり、調査を行った。3回ごとの調査内容は、「貧困に対するイメージや理解と貧困の意味(1回目)」「生活上の心配や困りごと(2回目)」「調査の結果確認とコメント(3回目)」である。

3. 倫理的配慮

本調査の実施及びそれに関する研究分析は、「北海道大学大学院教育学研究院における人間を対象とする研究倫理委員会」の承認を得ている(20-34)。なお、本報告に関連し

て開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

第1に、貧困当事者が考えている貧困の概念と定義を表すことができた。これは主に1回目の集まりで議論した貧困当事者が見た「貧困」に関する内容である。そこでは、参加者たちは「貧困」その言葉自体と「貧困」と関連する言説「アンダークラス」と「社会的排除」に対して、どちらかというとながティブなイメージを持っていることがわかった。そして、「貧困」は「金銭的・経済的」「制約的」「心理的・感情的・精神的」「関係的・階級的」「労働的・時間的」「教育的」「健康的」という7つの側面の意味を有する概念であり、「相対的貧困」と近い定義だという参加者たちの考えが示された。

第2に、貧困当事者のエイジェンシーと貧困の構造上の制約を考察することができた。これは主に2回目の集まりで議論した、貧困当事者が経験した「貧困」、すなわち参加者たちが抱えている心配や困りごととその対応に関する内容である。そこでは、貧困当事者が様々な貧困問題を経験するなかで、＜やりくり＞＜反抗＞＜脱出＞＜組織化＞という多様なエイジェンシーを発揮したことが検討できた。さらに、貧困当事者がこれらのエイジェンシーを発揮する際に、彼らが直面した貧困の構造上の「物質的・経済的」「社会的・文化的」「政治的・代表的」の側面からの制約も考察できた。

なお、今回の調査はグループごとに3回の集まりを持ち行ったことから、議論が進むほど参加者たちの貧困認識が深まり、議論自体は「だれ」が貧困議論の主体となるべきか、「如何に」貧困を議論していくべきかまで発展し、参加者たちが貧困とはなにかを絶えず思考し再認していくことが見られた。こうした貧困当事者の「参加」によって更新される貧困議論では、「貧困の意味の構築」と「貧困議論の参加者である貧困当事者の確定」との両者の間に行き来することが非常に再帰的であることが示された。

5. 考察

本研究は日本における貧困当事者の視点から貧困を理解するという課題に対して、方法論の検討と実証上のトライアルの両面から、(1)如何に貧困当事者の視点から貧困を理解できるかに対して、日本では未だ前例が少ない参加型貧困調査の実証手法を解説し実践した。よって、これまでの貧困議論における貧困当事者の「排除」に異議を申し立て、貧困当事者がもう一つの貧困議論の主体として貧困の議論や調査研究に参加するアプローチを提供した。従って、(2)貧困を研究し理解していくうえで、いくつかの基礎的かつ重要な主題を検討するための貧困当事者の主体側に近い実証的なエビデンスを提供した。このことと同時に、貧困者が受動的な客体ではなく、適切なサポートがあれば自らの声で貧困を語り理解を深めていく能動的な存在であることを示している。また、貧困当事者は常に貧困の制約を受けているなかでも貧困を対処するために、多様なエイジェンシーを発揮していることも考察されている。よって、従来の貧困議論がもたらした貧困当事者の「他者化」に異議を唱え、日本における貧困を概念化していくのに豊富な材料を提供した。